

令和3年度 第1回小松市総合教育会議 会議録

- 1 日時 令和3年11月15日(月)
開会 午後1時30分 閉会 午後2時25分
- 2 会場 小松市役所3階3B応接室
- 3 出席者 小松市長 宮橋 勝栄(議長)
小松市教育委員会
教育長 石黒 和彦
委員 吉原 慎吾
委員 北村 嘉章
委員 中惣 恭子
委員 勝木 克子

(事務局関係)
総合政策部長 高田 哲正
総合政策部 経営政策課長 藤井 勝司
総合政策部 経営政策課主幹 井出 称子
総合政策部 経営政策課事務員 二木 有希
教育委員会事務局 教育次長 吉田 和広
教育委員会事務局 教育次長 横山 昭博
教育委員会事務局 シニアマネージャー 中田 一宏
教育委員会事務局 教育庶務課長 東谷 勝美
教育委員会事務局 学校教育課長 岩脇 司
教育委員会事務局 学校教育課指導主事 西田 崇生
教育委員会事務局 未来の教育課長 表 久美子
教育委員会事務局 生涯学習課長 坂下 義視
- 4 討議事項 ・「すべての児童生徒への学びの保障」について

5 会議の経過及び発言

○開 会

○宮橋市長あいさつ

- ・未来への投資の最たるものが教育であり、教育を充実させることが最も重要であると考えている。好循環のまちづくりを進め、小松市を選ばれるまちにするために、教育を重視して進めていきたい。
- ・本会議の制度が始まって7年目となるが、引き続き活発な議論を行い、様々な観点から助言や指導を頂きたい。

○討議事項

- ・「すべての児童生徒への学びの保障」について

<議長>

- ・議題「すべての児童生徒への学びの保障」について説明をお願いしたい。

<学校教育課 西田指導主事（パワーポイント資料に基づき説明）>

- ・不登校の児童生徒数は増加しており、年間90日以上欠席の生徒の割合も増加傾向。不登校の理由は、無気力や不安、友人関係など多岐にわたる。
- ・児童生徒が抱く様々な思いに寄り添うために、学校では日常の見取りや声かけに加え、定期的な面談やアンケート調査のほか、道徳の授業等で望ましい人間関係について考えたり、つまづきに対応した個別指導を行ったりしている。
- ・登校に困り感を持つ児童生徒には、校内に相談室やステップルームなど個別対応スペースを設け、学校に行くことが難しい場合には、教育研究センター内のふれあい教室を利用し学びの場を提供している。
- ・ステップルームとは、学校内の教室以外の居場所で、まずは安心して過ごしながら自ら学習予定を考え学習に取り組んだり、先生や友人と交流したりしながら自己肯定感や安心感を高めることで、進級や進学など次の段階へステップアップしていけるよう支援するもの。令和元年にモデル校として板津中でスタート、今年度は松陽中と国府中に設置し、今後は市内小中学校での設置を予定。ステップルームを利用して登校できるようになったという事例もでてきている。
- ・課題は専門の人員配置がないこと。職員全員を対象に研修を行い適切なスキルを身に付けることや、間仕切りやテーブルなど環境整備も必要。
- ・その他、オンラインを活用した支援も含め、すべての児童生徒への学びの機会を保障するための取組みを進めていく。

<議長>

- ・委員の皆さんからご意見やご感想をいただきたい。

<勝木委員>

- ・児童生徒の中には、会話をしたいという思いはあるものの、なかなか教室に入ることができなかつたり友達と話せないという子もいる。ステップルームを利用し少しずつでも進めていくことは良い取り組みだと思う。教室に行けない子どもにとっては、オンライン授業も有効な取組みではないかと思う。

<中惣委員>

- ・まずは小学生の不登校を減らすことが大切だと考える。コロナ禍のためか、気力や集中力が落ちた子どもたちが増えた聞き、不登校の児童が増えるのではないかと危惧している。オンラインに頼り過ぎず、学校で学ぶことの大切さや楽しさを子どもたちに伝えてほしいと思う。

<北村委員>

- ・様々な理由から、園児でも登園したくないという子どもがおり、そういった子が学校に行っても不登校になりやすく憂慮している。出来るだけ早い段階で不登校に対応することが大切であり、ステップルームの取組みはよいことである。また、学校だけで解決するのではなく、様々な機会を通して、家庭や地域と連携しながら総合的に取り組んでいく必要がある。
- ・学力向上だけではなく、将来社会で自立して生きていける人間を育てるために、義務教育は非常に大切な時期である。先生方がゆとりをもって子供に接することが大切であり、そういった時間を持てるよう、学校としても考えてほしいと思う。

<吉原委員>

- ・不登校児童生徒への対応においては、学校と家庭との関わりが大切であると考え。学校には、ステップルームの取組みだけではなく、家庭との関わりも十分行ってほしい。学校によって対応に差が出ないよう運用の基準を設けるなどしてはどうか。

<石黒教育長>

- ・この2年間、子どもたちにとってコロナ禍の影響が大きいと感じる。単に不登校をなくすのではなく、悩みを誰にも相談できない子どもの話を聞いて、段階を踏んで少しずつ引き上げていきたい。不登校の子どもたちは挫折や後悔を味わっており、そういった悩みを聞き、話をしながらお互い寄り添っていくことが大切。「不登校」の枠で終わらせず、皆でステップアップさせていく仕組みを作っていくことが必要。また、親も悩んでおり、親に寄り添うことも大事である。無理に学校に来させるのではなく、子ども一人ひとりの目線を持ち、自己肯定感を付けさせることが大切。

<議長>

- ・先日、子どもがフリースクールに通っている保護者と話す機会があったが、親が相談する先や子どもが学ぶ場として、学校に固執しすぎずにフリースクールという選択肢もあると言う勇気も必要なのかもしれない。公的、非公的なありとあらゆる受け皿を用意することが必要なのではないかと感じた。
- ・ステップルームの運営にあたり、今後は人的な余裕をどうつくっていくかが課題となるが、単に人を加配すればよいというものではないと考える。

<北村委員>

- ・以前は地域全体で子どもを見て支えていたが、今はそういったことがなくなってきたので、学校の先生が子どもたちをよく見て家庭と連携するのが一番大切だと考える。
- ・幼児期に規範意識等を身に付けた子は、離職率や犯罪率が低いというデータを目にした。幼児教育の充実や、幼保から小学校への連携も大切だ。
- ・子どもの学習に格差が生じないように、夏休み中の補習など、学校でできる範囲でカバーして行ってほしいと思う。どんな環境の子どもであっても、将来社会の一員として自立して生きていけるような学びを身に付けさせてほしい。

- ・学業以外でも非常に優れた能力を持つ子どももおり、褒められることで自信を持つことができる。ステップルームでの取組みを含め、先生方には子どもたちの得意な部分を引き出す学びを提供し、自信や肯定感を付けさせてほしい。

<石黒教育長>

- ・来年度から高校の学習指導要領はキャリア教育を重視したものに変わる。小中学校においてもキャリア教育に力を入れており、学びの向こう側、つまり社会とつながった学び新しいを取り入れたものになっていく。

<議長>

- ・これからの教育では、個性や長所の「伸ばしこぼれ」がないよう、一人ひとりをよく見て評価していく仕組みも必要。結果的には不登校の子どもも減るのかもしれない。

<中惣委員>

- ・コロナ禍で在宅時間が増え、子どもたちが各家庭で友達と通信制のゲームをする時間が増えている状況を耳にし、少し不安を感じている。

<勝木委員>

- ・学びについていけない、学校に行きづらいという思いを抱える子どもにどうやって寄り添い、応援し、居場所を作っていくかを考えてかなければいけない。そういった子どもたちは、周りの人が認めてくれるなどの思いがけないことがきっかけで、変わることができるかもしれない。周囲と信頼関係をつくり、自分に自信を持てる仕組みを作っていくことが大切。

<議長>

- ・この問題は、すぐに対応策が出てくるものではないが、今後も考え続け、一つ一つ成功事例を作っていくことが、一人ひとりの自立につながる。今後も委員の皆様にはそれぞれの立場で関わっていただきたいと思います。

以上

○閉 会